

18-9 授業解題

島名：グローバル・イシュー

単元名（教材）：ジョン先生と一緒に遊ぼう

場所：附属幼稚園 遊戯室

対象：5歳児 うめ組 さくら組

授業者：平田裕紀・高野史郎・長島茉衣

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

幼児期における直接体験を通じた共感的な理解が、小学校の中学年以上で異文化を受け入れる態度や、グローバルな課題を共感的に理解することの土台となることが期待される。本活動では、幼稚園の年長組2クラスに対して、一斉指導による異文化理解の方法を公開してもらった。広い遊戯室に子どもたちを集めて、異文化についての学習と遊びの活動である。遠くアフリカにあるブルキナファソの国の様子を、ジョン先生が持ってきたたくさんの写真と語りにより、子どもたちが積極的に聞き、質問しようとする学びの姿勢は、グローバル・スタディーズの基盤となるものであった。

「幼児」「遊び」をキーワードに、写真の画像を交えながらのブルキナファソの紹介は、子どもたちの興味関心を高める点で有効であった。ジョン先生が映す写真を見て、子どもたちが知らない世界の生活のありようを想像し、自らの生活と比較し、それぞれが考えたり質問したりするなどして、共通点や相違点を感じていた。また、周囲の子どもの質問を聞いて、自らも考え疑問をもつ姿が見られた。

ブルキナファソの子どもたちが遊ぶ「タイヤ転がし」では、子どもが楽しそうに遊んでいた。本活動を支えた重要な点は、ジョン先生とのこれまでの活動の積み重ねによる先生に対する親しみといえる。人によるつながりが、子どもたちが受け身的に話しを聞くのではなく、主体的に話しを聞き、疑問を持ち、質問しようとする姿の出発点である、という意味がある。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

今回は、グローバル・イシューとして活動を行った。だが、幼稚園生では、「日本や外国」といった概念の認識がまだ発達していない。この段階を「プレ・グローバル」と位置付け、子ども自身の直接的体験を手がかりに、他者との違いを楽しみ、自分が暮らしている所と異なる場所があることに気づくことが学習目標となる。プレ段階での直接体験による共感的理解の積み重ねが、それ以降における異なるものへの共感的な理解の土台となると考えられる。

この時期には、楽しかったという経験が大切で、まだ頭で理解できなくともいっしょに遊ぶことでブルキナファソへの理解を促した。

この時期には「楽しい」で終わってもよく、後から「ブルキナファソ」が思い出せればよい、との考えもある。ただし、カリキュラム開発の観点からは、ジョン先生との時間はグ

グローバルな世界への入り口である。ジョン先生と過ごした時間に得たものをどう日常の保育に活かしていくか、どうしたら子どもたちの生活がより豊かになっていくかを考えていくことが重要である。日常の保育とのつながりを考えると、グローバル・スタディーズ（プレ段階）を幼稚園のカリキュラム（園の教育目標と指導計画）にどのように位置づけていくかが課題となろう。